

# のびのび学習塾

大きな変化の中で考えること 外国語学研究科 2 年 佐藤 陽子
学ぶ姿勢を持つことの大切さ 経済学科 4 年 石川 千尋
ボランティアで学んだこと 法律学科 4 年 崎井 優太
個々の生徒に合った授業にするために 英語英文学科 4 年 桜井 素雅
子どもたちのためにできること 英語英文学科 4 年 佐藤 綾香
生徒にとって良い授業を行うこと 経済学科 4 年 佐藤 雄大
報告・連絡・相談 人間科学科 4 年 中島 佳穂里
のびのびの活動を通して 情報システム創成学科 4 年 平川 将也
のびのび学習塾での 2 年間 経済学科 4 年 平木 松治
「はじめ」のある環境づくり 英語英文学科 3 年 影山 千恵
のびのびで学び体験したこと 電気電子情報学科 3 年 木川 駿
学ぶ時間と遊ぶ時間の切りかえ 情報システム創成学科 3 年 唐 海鑫
のびのび学習塾で学べることとすべきこと 英語英文学科 3 年 長谷川 涼一

## 大きな変化の中で考えること

外国語学研究科 2 年 佐藤陽子

「土曜の午前中はのびのび学習塾」、そのような生活を送って既に 2 年半以上が経ちました。のびのび学習塾の事業が発足した当初から支えてくださった方がいなくなり、さらに、外国につながる子どもたちの学習支援に加えて、今年度からは JIN-KANA 学習塾に橋渡しをする中学 1・2 年生の学習支援も始まり、のびのびが大きく変わろうとしています。

のびのびに通っている子どもたちは、それぞれが異なる背景をもっており、学習目標や必要な支援も大きく異なります。今年度ののびのびの目標を「子ども一人ひとりのニーズに合わせた支援を確実に行う」と決定したのはそのためです。それぞれの子どものニーズに合わせた支援を行うには、まずは子どものニーズを知らなければなりません。ニーズを把握したら、さらにどのように学習を進めていくのかを考えます。のびのびでは、学生が一对一で子どもと学習していますが、その担当の組み合わせは完全な固定ではありません。したがって、ボランティアを行う学生全員が子ども一人ひとりを理解する必要があります。

のびのびの他に JIN-KANA でもボランティアを行っている私は、今年度から支援の対象となった JIN-KANA に橋渡しをする中学 1・2 年生の、最初の子どもの担当することになりました。中学 2 年生の女の子が来た初日は、「髪を染めている」「メイクをしている」「ネイルチップをしている」という、私が中学生の時に学校では見たことのない外見で、正直とても驚きました。どのように接すればいいのか、どのようなことを話せばいいのか、不安でいっぱいになりましたが、話を聞くうちに「中身は他と変わらない中学生なのだ」ということに気づき、段々と落ち着いて話すことができました。普段彼女は学校に通っておらず、ずっと家で過ごしています。

学校からもらうものは数学のプリントのみで、その他の教科は何も勉強していないとのことでした。のびのびでは数学と英語を学習することにしましたが、どちらも現在の学年のレベルには達していないため、中学 1 年生の学習を行いながら必要に応じて小学校の範囲まで遡り、確実に力を付けられるようにしていきたいです。また、家で一人でも学習できるようにプリントを準備して、学習時間を増やしていこうと考えています。なかなか自分からは話さない彼女ですが、来塾回数を重ねるごとに笑う回数が増えているのがとても

嬉しいのです。のびのびが彼女にとって居心地の良い場所となるように、これから学生全員でかわっていきたいです。

今年度から支援する対象が広がったことで、今後ののびのびに通う子どもたちはさらに多様化していくことが予想されます。現在でも課題はたくさんあり、我々学生は毎回手探りの状態で活動しています。しかし、それぞれの子どもたちが抱える困難に対して我々が真剣に向き合えば向き合うほど、「教える側には何が求められているのか」を考えるきっかけにもなっており、そのきっかけを与えてくれる子どもたちに「より良い支援をしたい」という思いを強くしています。今後ものびのび楽習塾という「チーム」で協力し合って、子どもたちのために活動を続けていきたいです。



## 学ぶ姿勢を持つことの大切さ

経済学科4年 石川千尋

私のがのびのび楽習塾に参加して多くの月日が経過しました。のびのび楽習塾では、神奈川県内の小中学校に通う外国につながる子どもたちと勉強をしています。私は社会科の担当を主にしています。3年生からのびのび楽習塾に携わっていますが、今までの活動の中で、外国につながる子どもたちの現状についての研修や外国につながる子どもたちと実際に触れあっていくことによって、自分がボランティアで関わる子どもたちのおかれている状況を知りました。研修では、全国的に外国につながる子どもたちがいる中で、国際教室のある学校があまり多くなく、外国につながる子どもたちのサポート体制が構築しきれていないという現状があることや、世界的に国際化がうたわれているにも関わらず、日本ではいまだに外国につながる事象に対しての対応力が低いという現状があることを知りました。

実際に、担当した子供にもそうした状況におかれている生徒は多く、教えた後学校ではどのような支援がされているのか心配になったこともあります。

このように、研修で培った情報は、活動を行っていくうえでの自信につながるので、引き続きこのような研修を重ねていき、外国につながる子どもたちについてさらに理解していくことで、のびのび楽習塾の活動につながるように勉強していきたいと考えています。

また、今年度から外国につながる子どもたちだけではなく、様々な問題を抱えた子どもたちがのびのび楽習塾に参加します。したがってこれからは、外国につながる子どもたちに関してだけではなく、彼らに関しても研修を行っていく必要がでてきます。今後は、様々な問題を抱えた子どもたちのおかれている状況を理解したうえで、それぞれの生徒にあった目標や勉強方法を設定していき、少しでも彼らの助けになれるように、常に学ぶ姿勢をもって活動にあたっていきます。

## ボランティアで学んだこと

法律学科 4 年 崎井優太

私がボランティアを始めて、1 年が経過しました。昨年は 1 年を通して所属するボランティアの生徒たちとコミュニケーションの取り方を学びました。初めは左も右もわからず、他の学生が生徒と仲良くなっていくのを見ているだけでした。しかし、その方法や生徒に対しての態度を観察して、実践することで、少しではありますが生徒と打ち解けていくことができ、現在に至ります。

私は昨年度の 1 年間で培ったコミュニケーション能力に加え、次の 1 年間は生徒への指導方法を学ぶ 1 年間にしたいと考えます。なぜかという、コミュニケーションを生徒ととれるようになりましたが、授業に関してはまだ上手く生徒に指導できず、無理やり理解をさせたり、生徒が納得するような答えや例えを出したあげるとできないことが多いと感じるからです。そのほかには生徒に退屈感を与えてしまったり、授業をしている内容についてしっかりと自信を持って答えを出せないこともあります。

以上のようなことがあっては、勉強をしに来てくれている生徒に対して申し訳ないと、私はいつも思っており、この 1 年間は生徒に対して「先生」としてしっかり胸を張って授業ができるように、予習や教材研究を行い、努力をしたしたいと思います。

### 個々の生徒に合った授業にするために

英語英文学科 4 年 桜井素雅

私が掲げた目標は、生徒一人ひとりに合った教材研究をして授業をすることです。この目標にした理由は、今年度からのびのびの体制に変化があったからです。昨年度まではどちらかというと、生徒や学生との交流や楽しんで学ぶことを主にしていました。しかし、今年から高校受験を控えた生徒や JIN-KANA につながる生徒が加わり、より学校や受験の勉強に比重をおいていくことが大切だと感じました。具体的に以下の 3 つの点について考えながら活動してきました。

一つ目は生徒の学習状況や課題を把握することです。学校の宿題をすることが大切な生徒もいれば、受験のための勉強をする生徒もいます。このように様々なニーズに応えられるように準備することが大切だと思います。まずは、

生徒自身のやりたい事を聞き出し一緒に計画や目標を立てていったり、先生方のアドバイスをいただいたりしながら、生徒と学生の間で方向性が一致しなければなりません。私は今年の活動の中で、生徒のやりたい勉強を聞いてあげられなかったことにより、生徒に嫌な思いをさせてしまったことがありました。二度とそのように生徒の勉強意欲をそぐようなことはしたくないと思い、授業のはじめには必ず生徒と何を勉強するか話し合うようにしています。二つ目は受験制度や高校の情報を収集することです。私は、神奈川県出身ではないため地元の受験制度と神奈川では異なる点があり、受験制度そのものをあまりよく知りません。例えば、学校の体育のカードが評価になることなどです。この体育のカードをきちんと提出せず、またこれが内申点に影響することを知らない生徒もいます。そのため、まずは学生が受験制度や成績についての情報を知っていて、生徒に適切に指導していくことが大切であると思います。三つ目は教科の専門性を高めることです。それぞれの学生の専門分野を生かして、より良い授業にするための教材研究や授業設計を考えることが大切だと感じます。生徒が学校でどのような授業を受けて、どのような教科書を使っているかなどはその教科の学生は知っています。それらを踏まえた授業内容を教科毎で考えることで、より充実した、要点をおさえた指導ができると思います。

私は、今までののびのびの明るさやゆるさを残しつつも、生徒の「確かな学力」を育てていける授業を行いたいと思っています。休日にも関わらず生徒が大学に来て勉強をしようという、そのやる気と期待に応えられるように、毎回の授業準備をしっかりと内容の濃い授業にしていきたいです。



## 子どもたちのためにできること

英語英文学科4年 佐藤綾香

のびのび楽習塾に参加して半年以上が経ちました。回数を重ねるうちに、活動全体の様子や子どもたちの状況など、以前よりも落ち着いて見ることができるようになったと感じています。日々の活動をより意味のあるものにするために、私が掲げた目標は「生徒の立場に立って接し、一人ひとりへの理解を深める」です。生徒の立場に立って接し、目の前にいる生徒が何を求めているのか、また、その生徒のために自分自身ができる最大限のことは何か考えながら活動することで、生徒一人一人への理解を深めることができ、そういった姿勢が実りある学習につながると考えたからです。こうした目標の下で活動していく中で感じたことを2点あげたいと思います。

まず1点目は、教材内容の見直しの大切さです。実際に生徒を目の前にして教えていると、何度も同じところでつまずきしっかりと理解できていなかったり、逆にスラスラと問題なく解くことができたりと、生徒の得意不得意が見えてきます。そうした生徒からのシグナルを見逃すことなく、その時々合った学習を提供してあげることが私たち学生の役目であると思います。そのためには定期的に現在使っている教材が本当に合っているのか見直したり、苦手な部分を見つけたら前の学年に戻って復習の時間を入れたりすることも必要になってくると思います。その際には、生徒にこういう力がつくからこの教材をやってみようときちんと明確に説明し、生徒自身が納得した上で学習の計画を立てていくことが大切です。ただ何となく与えられた教材をこなしていくのではなく、生徒が自分自身の成長を感じ、少しずつでもできることが増えていく、そんな学習の場になれば良いと考えています。

2点目は、生徒の背景を理解することの大切さです。のびのび学習塾に通う外国籍の子どもたちを取り巻く問題の中には、いじめ、進路、学校環境、家庭環境など様々なものがあります。生徒一人一人を本当の意味で理解するためには、学習以外にも彼らを取り巻く様々な問題を知り、考える時間が必要です。今後は研修の時間などを利用し、文献や新聞記事などを用いてディスカッションを重ね、外国人として日本で生きていく彼らの背景を知る機会を多く設けたいと思います。

最後に、今後活動していく中で大切にしたいことは、何事も子どもたちを中心に考えるということです。当たり前のことですが、日々活動する中で子どもたちのためののびのび楽習塾という、根本にあるものが揺らいでしまっているように感じることがあります。授業計画を立てるにしても、レクリエーションなどを行うにしても、まずは生徒の立場に立って考えることを忘れずに活動していきたいと思います。

## 生徒にとって良い授業を行うこと

経済学科4年 佐藤雄大

私がのびのび楽習塾の活動に参加し、およそ1年が経過しました。これまで活動の運営を担っていた先輩たちが卒業し、自分自身の周囲の環境にも大きな変化が起こり、以前よりも活動に参加できる回数は減ってしまいました。

そのなかでも、活動を通じて感じたことは、「生徒に合わせた授業準備の大切さ」です。現在では、外国につながる子供たちの支援のために、生徒一人ひとりの特性や性格に応じて準備をして、理解を助ける支援を目標として掲げています。以前の活動では、限られた時間の中で「より多くの学習内容を教えること」を目標と定めていました。そのため、多くの学習内容を教えようとし、生徒の理解よりも予め用意した範囲を学習することを優先していました。しかし、それは生徒の立場に立った指導ではなく、生徒の理解に役立つものではありませんでした。つまり、「広く薄く」教えるよりも、あらかじめ習得してほしい学習内容を定め、エピソードや体験談を交え「狭く深く」教える方針による学習の方が、生徒の記憶定着につながると感じました。なかでも、発達障がいを持っている生徒は、あらゆるものに興味を持ち、以前は授業のペースを握られてしまうことがありましたが、今では授業展開も円滑に行うことができるようになりました。

生徒に合わせた授業をするためには、生徒の生活環境についての理解を欠かさず、学習支援に携わるスタッフ間での情報共有を綿密に行うことが大切であると感じました。活動に参加する機会が減ったなかでも、事前に生徒の生活環境についての情報を確認し、それを踏まえ支援することを心がけています。今後も、生徒に合わせた授業準備を行い、より質の高い学習支援ができるよう尽力いたします。



## 報告・連絡・相談

人間科学科 4 年 中島佳穂里

私は毎週土曜日に大学で行われているのびのび楽習塾での活動を始めてから、半年以上が経過しました。当初は、外国につながる子どもたちとその保護者の方への学習のサポートのみを行っていたのびのび楽習塾ですが、現在は同じく神奈川大学の学校ボランティアの一つである JIN-KANA へつながる生徒への学習支援も行っています。

この半年間の活動を通して私は「報告・連絡・相談」の大切さを実感しました。のびのび楽習塾では多くの場合、一人の生徒に対し毎週異なる学生が担当をしています。そのさい、担当生徒の学習状況や性格について正確な引き継ぎが行われていなければ、生徒たちの限られた学習時間を無駄にしてしまうことになります。中には、部活動に追われ忙しい生活を送っている生徒、受験を本格的に考え始めていて、一回一回の学習時間が貴重な生徒もいます。様々な目標に合わせながら、それに合わせた学習を行うことができるのがのびのび楽習塾の利点であるので、そこをより生かすためにも学生同士の引き継ぎを確実にしなければいけないと感じました。また、のびのび楽習塾は参加する学生が毎週異なり、学生が全員集まることが非常に少ないため、そういった中で生徒たちにより安定した学習環境を提供するためにも、学生同士の「報告・連絡・相談」は非常に重要であると感じました。

参加している生徒に関しては、月一度のレクリエーションや、毎回のおやつ休憩中のコミュニケーションを通して生徒同士の交流が深まり、仲良くなったように感じます。生徒たちの仲が深まることは、生徒たちがのびのび楽習塾へ参加することへのモチベーションを向上させる一方、授業中の集中力欠如にも繋がることであると考えます。その点については注意しなければなりません、皆で学習に取り組む頑張ることは大変良いことなので、人数も増えているのびのび楽習塾全体で一体となり、けじめのある学習時間を過ごせるよう、学生同士で協力しながらより良い学習環境を作り上げていきたいと思っています。

## のびのびの活動を通して

情報システム創成学科 4 年 平川将也

のびのびの活動に参加し始めて約 1 年が経ちました。「のびのび」は今までは外国につながる子どもの学習支援を行っていましたが、4 月からはそのような子どもだけでなく、様々な問題を抱える子どもも学習支援の対象になりました。これから少しずつ新しい生徒が増えて行く予定です。新しい体制になって 3 ヶ月の活動の中で感じたことを書いていきます。

今回活動していく中で、1 番考えることが強かったのが、子どもへの対応の仕方についてです。生徒の中に以前からこだわりが強い性格の生徒がいます。のびのびで数学や理科、美術等の提出レポートの作成をしたのですが、完璧主義ゆえに、毎回うまく進まないことが多く、「上手く書けないでしょう」というようにイライラし始めてしまいます。私はその生徒に対して、「実験レポートはみんなまったく同じ様にはならないよ」や「漫画家さんと全く同じようじゃなくてもいいよ」のように声かけをしたのですが、その時はあまり効果が無く、少し悩んでいました。のびのびの担当の先生に相談しながら、まず何か行動を起こして、生徒の反応を見ていくこと、同じ対応をしても、その時によって反応が違うから、何度も繰り返してみる事が大切だと学びました。実際に、生徒が最初に自分のイメージした通りに作品を絶対に作りたいと言って、なかなか進めなかったのですが、3 回目の授業の最後に、「このままだと終わらないからちょっとここ変えてこういう風にしてみようか？」と言うと、「そうだね！それでやってみる！」と今までは嫌だと言っていたことに初めて違う反応を返してくれました。これから新しい生徒も増えていきますが、生徒それぞれの性格を掴んで、授業の中でどのような対応をしていくと効果的なのか試行錯誤していくと共に、うまくいかなくても焦らずに働きかけていくことを心がけていきたいと思っています。

最後にこの前期の活動の中で、運営の面で上手く行かなかったところがありました。これから本格的に生徒が増えてくるので、もっと気を引き締めていかなければいけないと思います。何がいけなかったのか、何をしていかなければいけないのか、しっかりと反省をして、後期の運営につなげていきたいと思っています。

## のびのび楽習塾での2年間

経済学科4年 平木松治

「のびのび楽習塾」でのボランティア活動を始めてから2年が経ちました。私が2年間の活動の中で心がけてきたことは、常に笑顔で子どもたちに接することでした。笑顔で接することで、少なくとも無表情で接するよりは子どもたちに安心感や親近感を与えることができると思います。そして、もう一つ心がけていることがあります。それは学習中に子どもが学習内容から派生した話を始めたときにも、その話をすぐに止めずにある程度一緒に話すことです。人と話す時間を多く設けることで、日本語を話す練習になると考えるからです。しかし、話の内容が学習内容から大きくそれてしまうと、流れを学習内容に戻すことに時間がかかり、事前に準備していた学習範囲を終わらせることができない点が、私の反省点でもあります。したがって、子どもとの会話を活かしながら、それを上手にその日の学習内容に反映させ、学習を計画的に進めていくことが今後の私の課題です。また、高校受験を意識している子どもたちも多くいることから、子ども1人ひとりの計画的な学習が求められてきます。そうした中で、私自身もコミュニケーションばかりではなく、各科目の研修などによる学生側の指導力強化も重要になってくると感じています。



## 「けじめ」のある環境づくり

英語英文学科3年 影山千恵

今年度の4月から、のびのび楽習塾で活動をしています。のびのび楽習塾を始めるまで、子どもに勉強を教える経験がなかったため初めはとても不安でした。

最初の約一か月は、先輩が授業をしているところを見学しました。初めて見させてもらったときに、想像していた以上に子どもと学生の距離が近いことに驚きました。まるで、友だちであるかのように楽しくお話ししながらも、学習に取り組むように導き、集中させていました。初めて子どもと1対1で学習をするときに、先輩がしていたようにやってみようと思ったのですが、うまくできずなかなか子どもに集中を促すことができませんでした。その授業では、担当の子どもが国語のワークの塗り絵をやり始めてしまい、勉強といえる勉強をまだしていなかったもので、どうすれば勉強の方に気をむけることができるか分からなくなってしまいました。その時に、他のボランティアの学生が来て、「あと5分で完成しましょう」と言うと、それまでゆっくりと丁寧に色を塗っていたのが、声をかけた途端塗るスピードをあげてすぐに塗り絵を完成させて、勉強に入ることができました。その様子を見て、子どもに「けじめをつけて」と勉強をさせるのではなく、私たち学生が、子どもたちがけじめのある活動をしやすい環境をつくっていかなくてはいけないのだと思いました。ただ、子どもの「やりたい」を優先するのではなく、「今日はここまでやったら、それをしよう。」と目標を設定するなどして、子どもたちに自ら勉強しよう、と思ってもらえるようにすることが大切なのだと感じました。

のびのび楽習塾に参加してから1か月半経ち、少しずつ慣れてきて、子どもたちとの距離も以前に比べて近くなりました。子どもと学生の距離がとても近いことは、のびのび楽習塾のいいところだと思います。その、のびのび楽習塾の穏やかで楽しい雰囲気を大事にしながら、子どもたちが自ら勉強しようと「けじめ」をつけることができる環境をつくっていくことを心掛けて、今後の活動に取り組んでいきたいと思っています。

## のびのびで学び体験したこと

電気電子情報工学科3年 木川駿

今期の、のびのびの活動では、数学の楽しさを教え、また、ほかの科目も教えられるようにするという目標を立てました。それを実践してみても生徒から学び、体験したことをここに述べたいと思います。

今期の活動において私が担当した教科は、主に、数学、理科、日本語を担当しました。そこで、生徒に数学を教えていくうえで学んだことを述べていきます。私が担当した多くの生徒は、数学が苦手でした。なぜ、数学が苦手なのかを生徒の様子や自分で考えてみました。そこで、考え付いたことは図形や計算などを頭の中で計算してから答えをだそうとして間違え、また、それらのイメージが出来ないため数学に苦手意識を持っているように感じました。そこで、教えていくうえで考え付いたことは、図形に関しては実際に作って見せる。計算については、なるべく詳しく書いていくようにしました。そうすることで生徒は、目で見たり、書いたり、説明を聞いたりするのでより学習が進むようになりました。また、時々、数学に関する豆知識を言うことでより興味がでることもわかりました。

また、それらを行っていくには生徒からの信頼関係も必要です。そのために、生徒とのコミュニケーションをとることによって、一人一人にあった指導をしていきやすくなることもわかりました。

今回、のびのびの活動において、生徒から学んだことをまとめると、どの教科でも生徒に対して楽しく理解させることが必要なことがわかりました。また、生徒からの質問を出させるためには、先生と生徒の信頼関係が必要であること学びました。そのようにすることによって、生徒は自ら学習するようになり、また、疑問ができれば先生に質問するというようになっていくことが、このボランティア活動を通じて学んだことです。

## 学ぶ時間と遊ぶ時間の切りかえ

情報システム創成学科3年 唐 海鑫

私は留学生として、「のびのび楽習塾」で外国につながる子どものサポートを始めて1年半が経ちました。ここでは、主に中国の女の子二人と一緒に学習しています。

小学2年生の女の子は、今年の3月に入塾しました。両親は中国人です。日本語は会話程度しかできないので、「のびのび」では日本語だけではなく日本の文化も学んでいます。最初はあまり話さず静かな女の子だと思いましたが、今ではだいぶ慣れてとても明るい女の子になりました。「のびのび」の活動は、1時間目と2時間目で、教科によって学生が変わるというやり方です。最初のころは、私が1時間目に彼女のサポートをし、2時間目は別の学生が行っていました。しかし、彼女は2時間目にも私のところに来てしまい、落ち着いて学習ができませんでした。それは苦手な日本語より、母語の中国語で話す方がずっと安心できるからだだと思います。このままでは学習がスムーズに進まないなので、私が2時間目を担当することにし、今では問題は無くなりました。また、50分の勉強時間は小学生には少し長いので、最後まで集中することも難しいと思います。そのため、勉強前に彼女と一緒に当日のノルマを決めて、この目標が終わるまでは集中して遊ばない、ということ約束しました。嬉しいことに、このような工夫をしたことで彼女のサポートは順調に進んでいます。

もう一人の中学2年生の女の子は、日本で生まれました。ずっと日本で生きている子どもですから、日本語には全然問題はないのですが、逆に中国語は日常用語くらいしかできません。そのため、昨年の年末から中国語の勉強を始めました。彼女は小学生の時から「のびのび」に参加しているので、学生とも仲良しになり、毎週来ることを楽しみしていました。成績を気にして、勉強にも熱心に取り組んでいました。しかし、今年の3月ころから彼女の様子が変わってきました。いろいろな理由で遅刻をしたり早退をしたり、また勉強中に集中できないことも多くなってきました。そのころから“眠いから、勉強したくない”という言葉もよく聞くようになりました。理由を聞いてみると、夜遅くまでスマートフォンのゲームをしているそうです。私は、彼女のこの状況がとても心配です。また勉強に集中できるように、先生方や他の学生と相談しながら進めていきたいと思っています。

『学ぶ時間と遊ぶ時間の切りかえ』は、中学生だけではなく大学生にとっても向き合わなければいけない問題だと思います。私たちが良い解決策を見つけ、その経験を子どもたちに教えていきたいと思っています。

## のびのび楽習塾で 学べることとすべきこと

英語英文学科3年 長谷川涼一

今年の四月にのびのび楽習塾でのボランティア活動を始めさせていただいてから、現在で三ヶ月目を迎えました。私がこのボランティアを始めるきっかけとなったものは、神奈川大学内で行われている学校ボランティアについてのチラシでした。年度の初めということもあり、何か新しいこと、有意義なことを始めたい、そして将来高校の教壇に立ち英語を教えることを考えて、生徒に教える経験を積みたいと思って私はすぐに外国につながる子供たちを支援するのびのび楽習塾に興味を持ちました。実際に活動を始めると、教師として必要なたくさんのことを学びながら、自身の課題や、のびのび楽習塾に通う子供たちが何を求め、彼らに何が必要であるのかが少しずつわかってきました。

のびのび楽習塾では活動に携わる先生方や、先輩方、そしてそこに通う子供たちからも学ぶことがたくさんあります。先生方は、学生が主体となって動くのびのび楽習塾の活動を的確にご指摘で支えてくださっています。先生方のアドバイスからは未熟な自分では及ばない考えを学ぶことができ、また子供たちの学校での様子や進路についても考えられていて、生徒を捉える視野が広がりとても勉強になります。自分に先駆けて活動に参加している先輩方からも、自分とさほど年齢も違わないにもかかわらず日々学ぶことが多いです。先輩方は子供たちと楽しそうに会話を交えていて、一見するとただの憩いの一時に思えるものの、実際は生徒の発言や様子からその生徒の状態をよく観察していました。それに基づき、次の活動をする時にその生徒に関して気を付けるべき点を挙げ、全体に共有していることに気付いた時、自分もある程度考えを持って子供たちと接するべきだと思いました。

子供たちからは、教師として在るべき姿勢を認識させられます。活動をしている中でお互い

に距離が縮まり、つい授業時間内でも無駄な話を始めてしまうことがあり、またわからない問題があれば有耶無耶にして逃避しようとする様子もしばしば見られます。個人としては子供たちが楽しそうにしてくれれば嬉しいのですが、教師の立場として思い直した時、時には厳しい言葉で指導しなければいけないのだと気付くことができました。自分自身が芯を持って正しいことを説得することで、子供たちもわかってくれることに気付けたのです。

しかしながら、個性が強く、自分のしたいことをしっかりと持っている彼らがたまに投げかける突飛な発言に対し、頭ごなしに自分のエゴを押し付けて否定してしまうことはせず、彼らの考えを尊重しうまくフォローしたいです。

まだ完全に活動をこなせられていない現状の自分が、今後掲げたい目標としては、子供たちがのびのび楽習塾にきたい、毎日が楽しい、そして活動を終えるたびに何か学んでいる。そう思ってくれるようにしたいです。そのためにはまず、自分から積極的に子供たちに話しかけ、明るい雰囲気を作れるようにしたいです。最近になり、遅刻を繰り返す子供がいます。土曜の朝からということもあり、登校することが億劫なこともあるかもしれませんが、私としては少しの活動時間も無駄にせずに、土曜ののびのびが楽しみだと思ってもらいたいので、密度の濃い授業と子供が笑顔でいられる空間、そして我々教える側への強い信頼、これらを念頭に毎回活動していきます。

学校ではなかなか勉強だけに集中することができないこともあると思うので、のびのび楽習塾では安心して勉強と向き合って欲しいと思っています。それに加え、学校の先生に言えない悩みでも、のびのび楽習塾で少しでも吐き出して気持ちを楽にしてあげられるような、そんな場になれば良いと思います。そのために私ができる精一杯のこと、教えることができるすべてのことを、一人一人の生徒を尊重した教え方で伝えられるよう努め、このボランティアを通して成長しながらそれらのびのび楽習塾に還元していきたいです。

発行日：2015年7月17日(金)

発行場所：神大ユースサポートプロジェクト(JYSP)

TEL：045-481-5661(内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

URL：http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher\_training\_course/jysp/



# 青少年の居場所

## 目次

「フットサルを通じて」 法学学科 3 年 八代麻央
「新たな気づきと課題」 英語英文学科 3 年 清水浩平
「意識改革」 人間科学科 3 年 榎本航太

### 「フットサルを通じて」

自治行政学科 2 年 八代 麻央

「青少年の居場所」のフットサルボランティアを始めてから、半年以上がたちました。フットサルボランティアでは、フットサルをするためのゴールやネット、ボールの準備から活動が始まります。それらの準備が整い次第、軽く体を動かしたり、順番にボールをけりあったりします。そして、その日に集まった生徒・大学生・社会人の方々が円になり、今日の内容確認とあいさつをします。その時々的人数に合わせてチームを決めて、時間を区切りながらの試合を進めていきます。その日の終了時間になったところで試合を終わりにして、備品を元あった場所に戻し、体育館の掃除などを終えたら再び円になってあいさつをし、活動終了という流れです。

私の目標は、“スポーツを通してコミュニケーションをとり、生徒たちと一緒に楽しむ”です。他の学校ボランティアではあまりメインにはならない、スポーツ（フットサル）が私たちの活動の中心にあるので、そのことを生かした支援ができたから、より深く生徒たちと関わっていくことができると思います。また、学校における時間の大半を占めている授業という枠組みではなくて、いわば部活動のようなフットサルボランティアでは、普段とは異なる接し方ができ、積極的なコミュニケーションをとる良いチャンスだと考えることもできます。さらには、授業と異なる点の一つともいえるかもしれませんが、生徒たちと一緒に楽しむことができるのです。同じチームメイトとして試合を行ったり、一緒に準備や片付けをしたりしていくことは、生徒との話すきっかけにあふれています。

これからの活動については、目標をボランティア全体で共有していくことができれば良いなと思っています。というのも、現在はフットサルボランティア全体に共通している目標がないからです。共通した目標を決めておいたほうが、フットサルボランティアとしての団結力や、組織としてのチームワークにつながると思います。そしてこれからも、積極的な姿勢で日々成長していきたいです。

## 「新たな気づきと課題」

英語英文学科3年 清水 浩平

私は今年度、「青少年の居場所」のフットサル活動に再び参加し始めました。昨年度は授業の関係で後期は参加することができなかったのですが、子どもたちや指導者の方々が私のことを覚えてくださっているか心配でした。しかし4月に体育館に行くと「久しぶりだね」と声をかけてくださりました。そのおかげもあり、すんなりと溶け込むことができました。現在は週2回、子どもたちと一緒にフットサルを通して交流を図っています。

久しぶりに活動に参加してみてもう初めに感じたのは、中学生以上の生徒の人数がとて多くなっている、ということです。人数が多くなったことで活動自体の活気もとて高くなり、子どもたちにとって良い環境になりつつあると感じています。試合をする際にも大人のプレーを見て、どのようにしたら効果的な攻め方ができるか、大人に勝つためにはどんなプレーを心掛けなければいけないか、などといったことを自然と考える環境になっているのではないかと感じます。

児童と接していて大事だと思ったことの一つに、「良いことと悪いことの区別をしっかり教える」ということがあります。自分たち以外のチームが試合をしている間は、待っているチームが得点係とタイムキーパーをしなければ、そのチームは試合ができないという決まりとなっています。しかしある日、私が順番待ちをするために並んでいると、ある小学生が私の目の前に割り込んできました。その子はゴールの準備などをしながら私と話すうちに仲良くなった子の一人でした。仲良くなったからといって、全体のルールを無視するような行動は許すわけにはいかないと思った私は、その子が理解してくれるように諭しました。一度は渋りましたが、最終的にはきちんと私の後ろに並びました。フットサル以外の場面でも、子どもたちに正しいことを教える場面はたくさんあると私はその時感じました。

フットサルは子どもから大人まで、幅広い年齢の方が楽しめるスポーツです。また、この「青少年の居場所」は様々な方が一堂に会して一緒にプレーをすることに意味、意義があると思います。この素晴らしい環境を最大限活用し、子どもたちがフットサルを通じて成長することがこの活動の目的であり、目指すべき形なのだと思います。また、それを私たちのようなボランティアが支援し

たり、中学生、高校生と共に活動しながらよい手本を示したりすることで、この「青少年の居場所」でのフットサル活動はより良いものへ変わっていくのだと思います。また、自分自身も周囲に気を配り、コートの中はもちろん、フットサル以外のところでも周りに良い影響が与えられるように努力していきたいと思います。



## 「意識改革」

人間科学科 3 年 榎本 航太

青少年の居場所のバンド活動に初めて参加した日から、ちょうど1年が経ちました。始めたばかりのころは、毎回の活動を乗り切ることが精一杯で、自分が子どもたちに対して何かをしてあげられたという実感がありませんでした。むしろ子どもたちや保護者の方々に「頑張れ!」と支えてもらっていたような気がしました。活動初日の活動日誌を読み返すと「不安」「迷惑」「反省」といったマイナスの言葉ばかり目立っていました。青少年の居場所のグループリーダーになってからは、活動で扱う楽曲を自宅で練習したり、演奏が難しい所をチェックしたりして、子どもたちにどう教えるかを事前にシミュレーションし、自分なりに準備をして活動に取り組んでいました。しかし、そうやって準備していてもうまく教えられなかったり、教えている途中で子どもが遊びだしてしまったりと、毎回のようには歯痒い思いをしていました。グループリーダーとして手本にならないといけないという思いが強くなり、すこし空回りしていたのかもしれません。活動に行くのが嫌になった時もありましたし、「向いていないのかもしれない」と思った時もありました。

私が、今期から常に心がけていることは「気負わないこと」です。これは「頑張らないこと」「手を抜くこと」と紙一重に受け取られるかもしれませんが、これまでの活動で経験してきたことを踏まえて心がけていることなので、自分なりに納得して活動に取り組んでいます。「気負わないこと」を心がけるようになってからは、今まで自分の中でまだどこか緊張していた部分や、グループリーダーとしての責任感を緩和させてくれているような気がして、常に自然体で取り組んでいます。今期はまだ数回しか活動に参加できていませんが、子どもたちの変化に気づくことができるようになりましたし、冷静に状況判断ができるようになり、活動中の出来事に優先順位をつけて対処できるようになりました。担当の先生をはじめ保護者の方々からも信頼して頂けるようになったと感じます。何よりも子どもたちが私に対して友達のように接してくれることがとても嬉しいです。

私が活動を始めた時に小学6年生だった子どもたちは、今年の4月から中学1年生になりました。去年と比べて体が大きくなったと感じるし、彼らもまた私と同様に何らかの意識改革があったのではないかと思います。活動を見ていると、常に落ち着いていられるようになりましたし、練習

に対する姿勢がより熱心になっていると感じました。練習の合間に話をしていると「俺たちがこの活動を引っ張っていくんだ」という責任感が芽生えている様にも見えて、1年前とは見違えるほど立派になったと思いました。私は単純に彼らのことを尊敬していますし、同じ活動を行う仲間として、これからもお互いに成長していきたいと思っています。そのために今私ができるすべての事を全力で行っていくことが私のすべきことだと思いますし、また「青少年の居場所」のグループリーダーとしての責任だと思っています。





発行日：2015年7月17日

発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL：045-481-5661(内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

URL：http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher\_training\_course/jysp/



神奈川大学 教職課程



**発行日：2015年7月17日**

**発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト (JYSP)**

**TEL：045-481-5661（内線4352）**

**FAX：045-413-4154**

**E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp**